小泉八雲

「怪談」（耳なし芳一など）で有名な小泉八雲＝ラフカディオ・ハーンは、一八五〇年ギリシャのレフカダ島で生まれました。父はアイルランド人、母はギリシャ人でした。四歳頃、父の故郷アイルランドのダブリンに移りました。六歳の時に父と母が離婚したため、ハーンは近くに住む大叔母に引き取られました。しかし、幼いハーンは、親からみすてられたショックや不安から、毎夜、ゴーストに苦しめられる夢を見ていたそうです。そんなハーンの心の支えは、大叔母の家で世話になっていたジェーンという女の人でした。彼女は六歳の八雲にやさしく接し、いつも神さまの恵みについて語ってくれました。

ある日の夕暮れ時、ハーンは、黒いドレスに身を包んだ彼女を見かけたので、「ジェーン姉さん！」と声をかけました。ふりかえった彼女の顔には、目・鼻・口がありませんでした。「アッ！」と驚きの声をあげた瞬間、その姿は一瞬のうちに見えなくなりました。ハーンは非常に驚き、恐怖におそわれましたが、わずか数日後、ジェーンは肺炎で亡くなってしまいました。ハーンが大人になってえがいた幽霊に、ただ怖いだけではない「何か」があるのは、やさしかったジェーンを忘れられないからだといわれています。

一三歳のとき、遊びのさなか友達がはなした縄がハーンの左目に激突しました。それが原因で彼は視力を失ってしまいました。父母がいないこと、左目が見えないことからいじめられたこともありました。ハーンの少年時代はつらいことがたくさんありました。

一七歳のとき、大叔母が破産したので生活に困るようになり、すきだった学校も退学しなければなりませんでした。しかし彼は、決してなげいたり、あきらめたりするような人ではありませんでした。

一九歳のとき、大きな夢をもってアメリカへ行く決意をして、移民船に乗りこみニューヨークへ上陸しました。彼は、シンシナティーに住みましたが、この町は移民や混血児がたくさん住む活気あふれる所でした。ハーンは電報配達員、下宿屋（下宿の馬小屋で寝とまりしました）で下働きなどをして暮らしました。非常に貧しい生活でしたが、彼は毎日、公立図書館に通い、本を読み物語を書いて過ごしました。ハーンにとってはこの頃が一番苦しかったのですが、最も充実した勉強ができた時代でした。

やがてハーンはアトキンという年老いた印刷屋と仲良しになりました。彼はハーンに「家がなければ自分の店に遊びに来なさい。給料は出せないが、寝る所はあるよ」と優しい声を掛けてくれました。ハーンが遊びに行くと、印刷で残った紙などでベッドを作り、寝とまりをさせてくれました。ハーンは妹への手紙に「気持ちのいいベッドだった」と書いています。アトキンの好意を受け、ハーンは自分の一生の仕事としてジャーナリストを目指すことになりました（二二歳頃）。

彼は地元の小さな新聞社を訪ねました。か細い声で「私の原稿を買ってくれませんか」と言い、コートの下から原稿を取り出して机に置くと、逃げるように走り去りました。新聞社の主筆は原稿に目を通しました。彼はびっくりしました。魅力的な文章の中にキラリと光る力強い思想があふれていたからです。ハーンの最初の文章は、まもなく新聞に掲載されました。それ以来、ハーンはときおり原稿を持ちこみ、載せてもらうようになりました。

二四歳のとき、ハーンはここの新聞記者に採用されました。編集者のコッカレルという人はすごく厳しい人でした。この人は、やがて大新聞社の主筆となり、たくさんの優れたジャーナリストを育てました。記者になったばかりのハーンは、コッカレルと出会ったことから大きく育っていったのです。

ハーンは、さらに猛烈に勉強して色々な知識を身につけていきました。古典から現代まで幅広くヨーロッパ、アメリカの作家の作品を無数に読み、文学作品を書く実力も身に付けました。その頃の新聞記者には、ハーンのような能力をもった人はいなかったので、大事にされました。

若いハーンは正義感が強く、弱く貧しい人たち、黒人たちに共感しました。そして異文化、珍しいもの変わったものに強い関心をもつようになりました。ハーンは新しい発想で、読者の興味をひく見ごとな記事をたくさん書いていきました。彼の書く記事はいつも評判になり、とうとう大新聞社の文芸部長にまでなりました。

ハーンは、自由なテーマで執筆活動を始めました。この頃の彼は、一日一六時間も原稿を書くすさまじい書き手でした。彼はヨーロッパの新しい文芸作品の紹介・書評、外国文学の翻訳、そして小説を書き本を何冊も出版しました。この期間は新聞記者としてよい仕事をしながら、文学の修行にも励んだ時代だといわれています。ハーンの欧米文学の知識や翻訳は、当時の知識人に受け入れられ、ニューヨークの文壇から高い評価をうけました。その頃ハーンは、自分が信頼し尊敬する人が教えてくれた「日本」に興味をもったのです。

明治二三（一八九〇）年、ハーンが四十歳の年、ある雑誌社から旅行記をたのまれ日本へ来ました。そして、知り合いの紹介で、島根県松江中学校の英語教師になりました。ハーンは、新しい土地にたちまち夢中になりました。そして、素晴らしい日本のことをたくさん紹介していくのです。

翌二四年、ハーンは小泉セツと結婚し、二九年に日本国籍を取り、名を「小泉八雲」となのりました。八雲は日本の文化や暮らし方を愛し大切にしたので、たくさんの人々から敬愛されました。

ハーンの優しさを伝えるエピソードがあります。それは、奥さんがわんぱく小僧たちにいじめられていた小猫をつれて帰ったとき、「おおかわいそうの小猫、むごい子どもたちですね―」と云いながら、びっしょりぬれてぶるぶるふるえている小猫を、そのまま自分の懐に入れて暖めてあげたのです。

彼は東京大学文学部の英文学講師となり新宿区富久町（後掲写真参照）に住みました。その後、大久保に移り（写真参照）、早稲田大学の講師となりました。その年九月二六日、妻子の身を案じ自分の仕事を気にしながら「ああ　病気のため・・・」の一語を残し、狭心症のため五四歳でなくなりました。

法名は「正覚院伝浄華八雲居士」

彼の生涯と作品を通して、児童・生徒に伝えたいこと

○ハーンの向上心、知的好奇心、不撓不屈の精神のすばらしさ

○日本人、日本の伝統・文化・風俗・習慣の優れたところ

資料編

◇八雲の業績の一つは、日本人の素晴らしさ、文化レベルの高さを広く世界に紹介したことです。彼は「**日本の面影**」で、日本の「魂」を世界に発信しました。

「**日本の面影**」からその一部を紹介しましょう。

○日本人は並はずれた善良さをもっています。奇跡的と思えるほどの辛抱強さやいつも変わることのない慇懃(いんぎん)さ（真心がこもっていて、礼儀正しいこと）、素朴な心、相手をすぐに思いやる察しのよさに、目を見張るばかりです。

○北斎や広重の色版画には、日本の町全体を買い取る以上に高いといわれる多くの西洋画よりも、それ自体にずっと本物の芸術味が詰まっています。

○どうして日本の樹木は、こんなにも美しいのでしょうか。西洋では、梅や桜の木に花が咲いても驚くほどの光景にはなりません。しかし、日本のこの美の奇跡には思わず目がくらむばかりです。

○日本の生け花の流儀を学んでみると、西洋のフラワーアレンジメントに関する観念がいかに通俗的なものか考えさせられてしまいます。

○日本の庭が芸術として目指すのは、現実の風景の魅力を忠実に模倣し、本物の風景が伝えるのと同じ印象を同じように伝えることにあります。日本の庭園は、庭であると同時に、一幅の絵であり、一篇の詩です。

○近代日本の教育制度においては、教育はすべて最大限の親切と優しさをもって行われています。教師は文字通り教師（teacher）であって、英語のmasteryの意味におけるような支配者ではありません。教師は、自分の考えを生徒に押しつけようとはしません。教師は、決して頭から叱りつけるようなことはせず、生徒を非難することもめったになく、懲罰を与えるようなことは決してありません。日本の教師で生徒を殴る者はいません。平静さを失って怒ることもありません。そんなことをすれば、教え子たちや、同僚たちの眼の前で、自分を貶(おとし)めたことになるからである。

（八雲は日本の学校現場を四年間経験しています。生徒がさわぐのは教師の指導力がないからだとも言っています。）

◇彼はアメリカの友人に宛てた手紙に、次のように書いています。

「私は強く日本にひかれています。（略）この国で最も好きなのは、その国民、その素朴な人々です。天国みたいです。日本人は、正直で勤勉で礼儀正しい国民です。世界中を見ても、これ以上に魅力的で、素朴で、純粋な民族を見つけることはできないでしょう。日本人の神々、習慣、着物、鳥が鳴くような歌い方、彼らの住まい、迷信、弱さのすべてを愛しています。私は、できるなら、世界で最も愛すべきこの国民のためにここにいたい。ここに根を降ろしたいと思っています。」

◇八雲は、古い伝統と文化を守る城下町の松江を大変気に入りました。この地で見た光景を、西洋で失われた自然への畏敬、八百万(やおよろず)の神々への信仰が、日本では生きていることに驚き、心から共感しました。そして、日本の民話や伝説、怪談などを聞き集め、それらを作品にまとめて、海外に紹介しました。

◇八雲は、昔ながらの日本の家に住み、着物を着て、日本人のように箸で日本料理を食べ、座蒲団に坐って煙草を吸い日本の習慣に親しみました。「西洋文明から、日本の自然なごくふつうの生活環境にとけ込むと、プレッシャーが減ります。西洋文明の特徴である個人主義が、ここにはないからです。それは私にとって日本社会の魅力の一つです。日本人は、他人を犠牲にしてまで、個人の範囲を広げようとは

しないのです。」　小泉八雲が追求し、作品の中に描こうとしたものは日本の「魂」でした。日本のよき「魂」を伝えるからこそ、彼の作品は、海外でも多くの人々を引き付けているのでしょう。わたしたち日本人のご先祖は、多くの欧米人に称えられる美徳をもっていました。

◇彼が東京帝国大学時代の教え子達に対して、文章論を説いています。その中で「文章はノートをもとに書き上げなさい。そして何度も書き改めなさい」と、学生達に繰り返し話しています。

例えば、「引き出しが九つもあるタンスを備えて、まず第一の引き出しに入れ、二週間ほどしたら、それを取り出し、書き直して次の引き出しに入れ、それから何ヶ月か経って、最初の印象が薄れかかった頃またとりだして書き直し、次の引き出しに入れ何度も書き直さないと、良い文章は書けない」と教えています。まさにすぐれた推敲のすすめです。

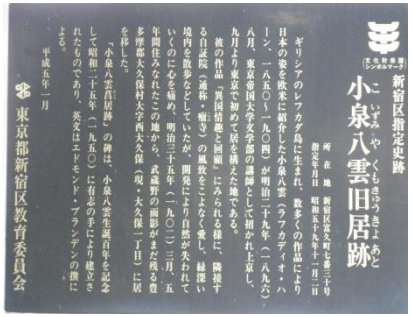
実際に小泉夫人は、八雲の推敲について、「主人は、『私の引出しに七年でさえも、よき物参りました』などと申していましたが、一つの事を書きますにも、長い間かかったものも、あるようでございました」と言っています。（小泉セツ「思い出の記」より）

ハーンは徹底した推敲で文章を書いていました。それは彼の文学作品すべてについてそうでした。

（参考文献）　大田雄三「ラフカディオ・ハーン」（岩波新書）
工藤美代子「ラフカディオ・ハーン」（ＮＨＫライブラリー）
池田雅之「新編　日本の面影」（角川ソフィア文庫）
新宿区教育委員会「新宿区の文化財（３）史跡」

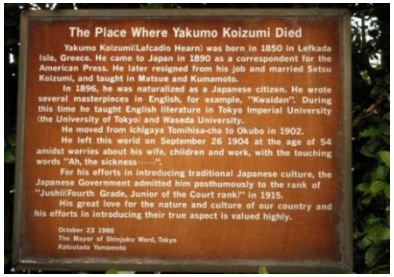
●**八雲の市谷富久町の旧居跡**（現在の成女学園の敷地内にあります）

「富久町の庭はせまかったのですが、高台で見晴しのよい家でございました。」（思い出の記より）



●**大久保の旧居跡・終焉の地（大久保小学校横）**　明治三五年富久町からこの地に居を移しました。

「自分でその家と近所の模様を見に参りました。町はずれで、後に竹藪のあるのが、大層気に入りました。至って静かで、裏の竹藪で、鶯（うぐいす）が頻りに囀っています。主人は『如何に面白いと楽しいですね』と喜びました。」（思い出の記より）



旧居の記録写真

小泉八雲記念公園（新宿区大久保一丁目）

◇大久保小学校の児童・保護者・地域の協力によって維持されている

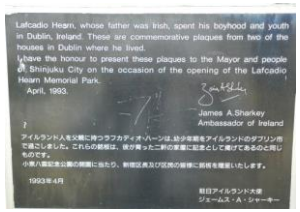
公園内から大久保小をあおぐ

新宿区の銘板

明治時代の文人小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）はギリシャ・レフカダ町に生まれ、現在の新宿区大久保一－一でこの世を去りました。新宿区とレフカダ町は、この縁をもとに相互に交流を重ね、理解と友情を深めるため、平成元年一〇月友好都市となりました。新宿区は、この度、小泉八雲が没したこの地に小泉八雲記念公園をつくりました。この公園の設計に当たっては、コンスタンティノス・ヴァシス駐日ギリシャ大使並びにスピロス・マルゲリス・レフカダ町長から詳細な助言をいただき、ギリシャ風の公園として整備しました。ギリシャの雰囲気を出すため、「古代の柱」や「集会場（アゴラ）」をイメージした「広場」、中世風の建物、近代のイメージとしての「白い壁」などを設けました。この公園が、日本を世界に紹介した小泉八雲を偲ぶ場所となり今後、新宿区とレフカダ町の友好がより一層深まることを願います。

平成五年四月　新宿区長　小野田　隆

アイルランド・ダブリンにある八雲旧居碑のレプリカ



レプリカの説明が書かれている

公園内にこの銘板があります

ギリシアから贈られた八雲の胸像

百日草、マリーゴールドなどの花がきれいに植えられています

2004 年 11 月に大久保小学校の児童は大久保サミットを開きました。右のフクロウの像を制作し、誓いを記しました（下）

◇自らの体験に基づいて書かれている八雲の作品には、高い評価が寄せられています。八雲は**教育者**としても多くの人々に影響を与えました。東京帝国大学や早稲田大学では、後に文芸界で活躍する多くの人々がその教えを受けています。この新宿の地で晩年を過ごした小泉八雲は、**近代日本に多大な影響**を与え、今なお多くの人々に愛されています。（新宿区説明板より）

◇公園内ではいろいろな言語を聞くことができます。（主に韓国語、そして中国語・ベトナム語ほか）。百年前にこの地に住んでいた国際人ハーンを記念する場にふさわしい雰囲気があります。

紹介

◇大久保小学校では小泉八雲を活用した授業や多彩な活動を展開しています。

次は、平成二四年六月一三日（水）に行われた授業の紹介です。

単元名「小泉八雲が時を越えてやってきた！？～八雲の愛した大久保にタイムスリップ～」

○ねらい　理由をはっきりさせて自分の思いを表現する力を育てる、など。

○本単元は、児童が、地域にゆかりのある小泉八雲の作品との出会いをきっかけに、八雲のものの見方や生き方、作品のおもしろさを知り、地域と八雲との関係に興味を抱かせたいという意図がある。このことを踏まえ、地域にある小泉八雲記念公園の所以やそれにかかわる地域の人の思いや願いに気付き、共感しながら、地域への愛着を深めていくことをねらいとしている。

○本単元の終末では、日頃から八雲公園の運営自治にあたる「公園サポーター」及び本年度より発足した「大久保婦人会」と連携を図りながら、「（仮称）八雲祭り」を計画、開催していくダイナミックな活動へと展開していく。地域の協力を得ることにより、文学作品を読み、調べる活動にとどまることなく、明確な目的に向かって児童の意欲を引き出し、探究活動を持続させていけると考えた。

○本時の活動の様子

いままで読み進めてきた八雲の怪談話の中から「小泉八雲のこわ～い話」について友達と話し合い、クラスのベスト3を決める、ことをねらいに、白熱した熱心な話し合い活動が展開されました。児童の話し合い活動、授業の流れも円滑で、先生の授業準備も万端でした。（「破られた約束」などは、とても怖いという感想には、納得しました。）

大久保小学校の子どもたちが、八雲の様々な作品に接して、彼のものの見方、考え方、日本人や日本の優れたところを、これからもたくさん学んでいってほしいと思いました。

五高時代のハーンの講義録発見　富山大図書館で（二〇一二年四月二七日）

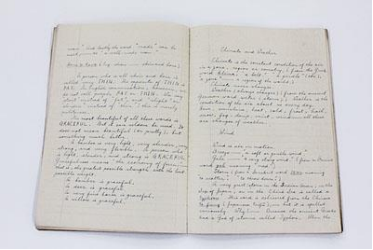
◇ラフカディオ・ハーン（小泉八雲、一八五〇～一九〇四年）が第五高等中学校（現熊本大）の英語教師をしていたころの授業内容を記したノートが、富山市の富山大付属図書館で見つかった。ハーンの五高時代の講義録が発見されたのは初めてで、英語の基礎を英語で丁寧に教えていたことがうかがえる貴重な資料である。

◇ハーンが五高教師を務めたのは一八九一年から約三年間。ノートは、福岡出身の倫理学者・友枝高彦が生徒だった九三～九四年に授業を筆記したもの。東京の書店社長が出版目的にさらに書写、社長の遺族が富山大付属図書館に寄贈していた。富山八雲会が、資料整理中に発見した。

◇ノートはＢ５判五二ページ。名詞や形容詞の意味、前置詞の使い方、語源などについて豊富な例文を挙げて英語で解説。「ＧＲＡＣＥＦＵＬ」（優雅な）の意味では「軽くスラリとして強く柔軟性があること」と説明、人間はこのような人が優雅であると付け加えて言葉の意味の深さなども教えている。

◇ハーン研究者の平川祐弘・東京大名誉教授は「身の回りにあるものを例に挙げて英語の用法を説明している。内容の詳しい解明はこれからだが、作家らしい巧みな英語解説が興味深い」と話す。

◇講義録は富山大のマリ・クリスティーヌ客員教授が復元。平川さんと熊本の研究者も協力した訳本が年内にも出版される予定になっている。（中村美弥子）



発見されたラフカディオ・ハーンの講義録ノート

名詞や形容詞の意味などが英文で解説してある。

（富山大付属図書館提供）